様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７７０２６１

研究課題名（和文）近現代イギリスにおける身体観・疾病観・死生観

研究課題名（英文）The Medico-Cultural History of Body, Disease and Death in Modern Britain

研究代表者
高林　陽展（TAKABAYASHI, Akinobu）

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：３０５３１２９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、19世紀後半から20世紀前半のイギリスにおける身体観・疾病観・死生観の変化を分析することを目的とし、具体的には現地調査を通じて体温計の利用法という事例を検討した。その結果、体温計の利用は、技術的発展、マーケティング技法の発展、1918-19年インフルエンザという新規感染症への恐怖、家庭看護を女性のジェンダーとする文化を要因とすることを確認した。この知見は、医療の社会史学会大会（於ケント大学；平成28年7月8日）にて口頭報告し、平成29年度には国際学会誌East Asian Journal of Science and Technologyに論文として投稿し、現在審査が進められている。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to study historical changes in viewing bodies, diseases and death in late nineteenth-century and early twentieth-century Britain, with a particular focus on the development of clinical thermometry, by accessing archival sources relate to tool makers and manufacturers of medical devices. As a result of this study, behind the development of clinical thermometry were such various factors as technical development, increasingly sophisticated marketing methods, a pandemic of 1918-19 influenza and its fear, and a gender role of home nursing attributed exclusively to women, which, this study concludes, constituted modern ways of viewing bodies, diseases and death in Britain. With this conclusion, the project leader presented a paper in an international conference of Society for the Social History of Medicine at University of Kent on 8 July, 2016, and has also submitted it to an international journal, East Asian Journal of Science and Technology.

研究分野：近現代イギリスにおける医療・身体の歴史

キーワード：近現代イギリス　身体観　疾病観　死生観　体温計測　マーケティング　インフルエンザ　ジェンダー

１．研究開始当初の背景

本研究の前提となる研究動向は、平均余命の拡大と疾病構造転換という歴史的現象に関する諸研究である。１９世紀後半から２０世紀前半のイギリスでは、より多くの人が致死性の感染症の脅威から逃れ、より長く生きるようになった。この近現代に特有の歴史的現象について、歴史人口学、社会経済史、医療史の研究者たちは、精力的に研究を展開してきた。イギリスの代表的な研究者としてはジェイムズ・ライリー、日本の研究者としては鈴木晃仁や永島剛らを挙げることができる。

彼らの主たる関心は、平均余命の拡大と疾病構造転換を数量的に実証することであった。国勢調査や疾病統計、友愛組合の疾病記録などをデータベース化し、感染症の数量的変化（減少）を歴史的事実として提起したのである。これに付随して、ライリーは、１９世紀後半の友愛組合の疾病台帳の研究から、ポスト感染症時代の人々が細かな身体の不調に敏感になり、比較的マイナーな不調でも自己診断による通院が増加したことを論じている。この論点は示唆的である。成人すればまず死なない時代が到来すると、人々は、生の中身を問うようになり、身体観が変化していったのである。

ただし、ライリーの研究は友愛組合の史料のみ用いるものであり、その議論は身体観に限定されている。ライリー以後、ポスト感染症時代の身体観・疾病観・死生観を実証的に検討する研究はほとんど現れていない。既存の身体観・疾病観・死生観に関する研究は、ライリーとは異なる研究の系譜を持っている。カルチュラル・スタディーズや表象文化論である。これらの研究の視角からは、身体・病・死について書かれた文献や図像が分析される。代表的な研究者としては、サンダー・ギルマンがいる。しかし、この身体と医に関する文化論は、実証的な研究対象を刊行された文献（主として文学作品など）に限定しがちであり、アーカイブに眠っている一次史料にはほとんど手をつけていない。

近年、感情の歴史、感性の歴史、痛みの歴史といった研究動向が英米圏では盛んになっており、それもまた身体観・疾病観・死生観へと迫るものである。本研究のテーマもまた、そのような国際的な研究動向を背景とするものである。

また、本研究が対象とする時期については、身体に関する医療一般においても、国家による医療政策が構築されていった。このことも、研究に際しての重要な背景となる。この点に関しては、社会政策史などにおいて政治的な次元における分析は多く蓄積されてきた。しかし、その前提条件となった身体観・疾病観・死生観に関する研究はまだ途上にある。特に欠けているのはやはり、アーカイブ所蔵の一次史料の分析である。文学作品などの刊行文献を用いて、有名な著作家の身体観などは分析されてきたが、それが社会全般を代表するかどうかは不明である。

２．研究の目的

以上のような研究動向を受けて、本研究は、１９世紀後半から２０世紀前半のイギリスにおける身体観・疾病観・死生観の変化を分析することを主たる目的として設定した。

また、副次的には、現地の文書館に所蔵されている一次史料を用いて、１９世紀後半から２０世紀初頭を生きたイギリスの人々の生活感覚を探求することもまた重要な目的である。上述したように、これまでの身体・病・死に関する歴史学的研究は、文学作品などの刊行史料を用いるものが多く、いわゆる「普通の人々」の身体観･疾病観･死生観に十分には迫れていない。本研究は、この点をアーカイブ史料というミクロな次元から迫るものである。ポスト感染症時代になると、主要な疾患は、癌や心臓系疾患といった生活習慣病へと変化してゆく。これらは、感染症とは異なり、長い時間をかけて緩慢に症状が進行することが特徴的な疾患である。これらの疾病に対して、人々はどのような反応を示し、また向き合っていったのか。この点をアーカイブ史料から追ってゆく。

さらに言えば、この研究テーマは、現代社会の形成にも関係する重要な論点を内包している。上記の内容から容易に推測されることだが、「微細な身体の失調の問題化」「生活習慣病や慢性疾患への注目」「死の非日常化と忌避感情の促進」といったポスト感染症時代に特有の現象とは、私たちがいままさに経験している歴史的現象でもある。この歴史的現象の起源をたどり、これを相対化することで、私たちが生きる時代をより正確に理解することも重要な目的となる。

３．研究の方法

前項で述べたように、本研究は、アーカイブ史料を用いて、１９世紀後半から２０世紀前半のイギリスにおける身体観・疾病観・死生観に迫ろうとするものである。公文書保管制度が整ったイギリスには、多くのアーカイブ史料が残されており、これを十分に活用することが研究方法となる。

具体的には、体温計の利用法に関する史料を検討し、研究をすすめた。体温計の利用法に焦点を定めたのは、この医療用機械が、病院などの医療現場で用いられるだけではなく、「微細な身体の失調」を理解するうえで個々人に日常的に利用されうるものだからである。現在、多くの家庭で常備されていることからもわかるように、この機械は、発明当初は医者の道具だったのが、次第に一般消費者向けに販売されるようになり、医療を生業とするものでなくても、自ら健康状態を判断するためにこの機械を利用するようになった。

具体的な研究の経過を以下で述べてゆき

たい。

平成２６年度（２０１４年度）においては、同年８月に、イギリスにおいて予備的な現地調査（第１次現地調査）を行い、イギリス・ロンドンに所在するウェルカム医学史図書館（Wellcome Library for the history and understanding of medicine）を中心として、二次文献の収集と分析を中心とした研究活動を実施した。その結果、臨床体温計の利用を重視した内科医 Clifford Allbutt や特定の製造業者の役割が体温計の発展や利用状況の拡大にとって重要だったことが判明した。また、体温計は１８７０年代に携帯できる小型商品が実用化され、一般家庭にも広がりを見せたこと、これによって、人々は日々の体調の変化を自ら観察できるようになったことも明らかとなった。

また、さらに細密な事例研究に資するアーカイブ史料を現地にて探索した。その結果、臨床体温計製造業者 Tagliabue and Casella 社（後の Cassella 社、以下 Cassella 社と略記）の一次史料がロンドン市内のハックニー文書館（Hackney Archive）に所蔵されていることが確認された。同文書館に所蔵されていた Cassella 社の史料群には、社の概要的な情報のみならず、商品の売り上げ状況を示す発注台帳が含まれており、体温計購入者のデータを手に入れることが可能となった。これまでの研究では、体温計技術の発展史が中心であり、具体的にどのような利用者が存在し、いかなる意図から実際にどのように用いたのかは探求されておらず、この点の探求を可能とする重要な史料が発見できたことになる。下記の表（Table 1-3）はそうした成果の一部を示している。

Table 1. Casella's Sales of Clinical Thermometers, 1884-1925

Year	Sales	Year	Sales
1884	6	1906	0
1885	2	1907	0
1886	0	1908	0
1887	0	1909	0
1888	0	1910	4
1889	6	1911	0
1890	0	1912	0
1891	0	1913	0
1892	3	1914	0
1893	5	1915	0
1894	0	1916	0
1895	0	1917	6
1896	0	1918	88
1897	1	1919	2054
1898	2	1920	2112
1899	0	1921	431
1900	3	1922	296
1901	1	1923	0
1902	3	1924	21
1903	0	1925	4
1904	1		
1905	0		

Source: D/B/CAS/10-13, Hackney Archive.

Table 2. Classification of the Purchasers of Casella's Clinical Thermometers

Purchasers	No. of Purchasers	%	No. of Sales	%	Sum (Pound/Shilling/Pence)	%
Individuals	21	15.4%	51	1.1%	7/13/5	0.8%
Retailers & Wholesalers	104	76.5%	4237	92.3%	907/13/5	94.8%
Public Institutions	7	5.1%	214	4.7%	29/5/.3	3.1%
Educational Institutions	4	2.9%	90	2.0%	12/15/3	1.3%

Source: D/B/CAS/10-13, Hackney Archive.

Table 3. Regional Classification of the Purchasers of Casella's Clinical Thermometers

Purchasers	No. of Purchasers	%	No. of Sales	%	Sum (Pound/Shilling/ Pence)	%
Domestic	109	79.6%	3737	81.4%	793/13/5	82.7%
Metropolitan Area	70	51.1%	2716	59.1%	596/14/4	62.2%
Local Cities	19	13.9%	822	17.9%	165/11/4	17.3%
Provinces	20	14.6%	199	4.3%	31/7/9	3.3%
OverSeas	20	14.6%	767	16.7%	161/2/6	16.8%
Unknown	8	5.8%	88	1.9%	11/17/4	0.5%

Source: D/B/CAS/10-13, Hackney Archive.

平成２７年度（２０１５年度）においては、上述の第１次現地調査をふまえて、第２次現地調査を実施した。ウェルカム医学史図書館、大英図書館（British Library）、北ヨーク文書館（North Yorkshire Record Office）、製薬小売店ブーツ社の史料部門（Boot’s Archive）などで各種一次史料を収集した。その際重要であったのは、前回調査において入手した Casella 社の体温計購入者データから、実際の購入者の氏名と住所を特定し、その情報をもとに他の文書館に残された史料を探求した点である。

たとえば、ヨークシャーに所在した私立学校 Great Ayton 校の校長 Herbert Dennis が Casella 社の体温計を大量に購入していたことから、この学校とデニスに関する一次史料を北ヨーク文書館にて調査した。その結果、Dennis が校長を務めた学校では、第一次世界大戦時のスペイン風邪（インフルエンザ）および女性向けの看護教育が体温計購入の重要な背景となっていたことが確認された。すなわち、感染症の予防とその看護のための女性教育のために、体温計は必要とされたということである。

また、Casella 社など医療機器製造業者の商品が実際に陳列され販売された小売店の観点を検討するべく、イギリス中部ノッティンガムに所在する、イギリス最大の医薬品小売店ブーツ社の史料部門も訪問し、体温計販売戦略について検討を加えた。具体的には、Merchandise Bulletin という本店から支店への販売指示書を検討した。その結果、この史料からは、スペイン風邪への罹患を気にする消費者に対してマーケティングを積極的に展開するよう指示が出されていたことが明らかとなった。これも上記の事例と同様に、インフルエンザの流行という感染症が体温計利用が一般に拡大した背景となっていたことが理解できる。

以上の現地調査によって、製造業者、小売店、利用者が織りなす、健康維持の力学が徐々に明らかとなった。繰り返しになるが、以上で述べたような近代ヨーロッパの健康意識と実践にかかわる歴史学的研究は乏しく、その意義を強調することができるだろう。

こうした史料上の結果を得たこともあって、この時点で、平成２８年度（２０１６年）医療の社会史学会（Society for Social History of Medicine）大会の口頭発表に応募し、採択となり、その準備も同時に進められた。そのうえで、２０１６年度以降は、研究成果の取りまとめと発表という段階へと研究の焦点を移行した。

平成２８年７月、イギリス・ロンドンのウェルカム医学史図書館において第３次現地史料調査を実施した。主たる目的は、補足的な史資料の収集であり、特に体温計測法の利用者の日記や手記の収集を行った。

４．研究成果

第一の成果公表は、医学の社会史学会大会「その場所における医学：医学を歴史的文脈に位置づける(Medicine in its place: situating medicine in historical contexts)」(於ケント大学、平成２８年（２０１６年）７月８日）での研究発表（査読有）である。この学会は、医療の歴史に関する世界最大規模の会合のひとつである。発表タイトルは、「『量的に把握された自己」－１９世紀末から２０世紀初頭のイングランドにおける臨床体温計測法の歴史」（The “Quantified Self” in History: Clinical Thermometry in England between Late Nineteenth and Early Twentieth Century）である。内容は、近現代イギリスにおける体温計測法の発展の歴史、体温計業者の販売台帳の分析、体温計の利用の具体的局面の検討である。この発表に対しては、実証面での子細な質問が出され、活発な議論が展開された。これにより、国際的な成果公表という目的を達成することができた。

最終年度である平成２９年度（２０１７年度）においては、国際学会誌への論文の投稿を目指し、論文執筆に注力した。そして、同年９月、国際的な学会誌である East Asian Journal of Science and Technology へと投稿し、現在審査中である。

またこの投稿を準備する段階で、国内の学会発表として、２０１７年６月２４日に立教大学史学会大会において、「史料から見る近代的身体－近現代イギリスにおける臨床体温計の製造・販売・流通をめぐって」と題する発表を行った。

その他の関連する研究成果としては、次項で挙げるように、単著論文として、“Surviving the Lunacy Act of 1890: English psychiatrists and professional development during the early twentieth century”が国際的な医学史の雑誌である *Medical History* 誌に掲載された。また、共著『精神医学の歴史と人類学』(東京大学出版会、２０１６年)、単著『精神医療、脱施設化の起源――英国の精神科医と専門職としての発展 1890-1930』(みすず書房、２０１７年)、共著『痛みと感情のイギリス史』(東京外国語大学出版会、２０１７年）などを中心として、身体観や疾病観にかかわる論考を発表してきた。

＜引用文献＞

① James C. Riley, Sick, not dead: the health of British workingmen during the mortality decline, Johns Hopkins University Press, 1997

② サンダー・L・ギルマン、ありな書房、病気と表象 ： 狂気からエイズにいたる病のイメージ、本橋哲也訳、1996

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計７件）

① 高林 陽展、正気と狂気のあいだ:コルニー・ハッチ精神病院火災事件(一九〇三年)の表象をめぐって、史苑、査読有、78 巻１号、2018、95-116

② Akinobu Takabayashi, “Surviving the Lunacy Act of 1890: English psychiatrists and professional development during the early twentieth century”, *Medical History*,査読有、 61(2), 2017, 246-269

③ 高林 陽展、後期フーコーと近代史研究のこれから（特集 近代の編成原理 ： イギリス、アメリカ、日本における組織、倫理、専門知)、史苑、査読無、76 巻 2 号、2016、145-154 DOI:doi/10.14992/00012086

④ 高林 陽展、第一次世界大戦期イギリスにおける医学の制度化:生理学の興隆をめぐって（特集 近代イギリス科学の制度化 ： イギリス史研究者の視点から)、化学史研究、査読有、43 巻 3 号、2016、156－169

⑤ 高林 陽展、戦争神経症の「歴史」から「文化史」へ ： 戦争と神経症はなぜ結びついたのか（第 19 回日本精神医学史学会）-- (シンポジウム 戦争と精神医学)、精神医学史研究 =Japanese journal of history of psychiatry、査読無、20 巻１号、2016、32-36

⑥ 高林 陽展、20 世紀前半イングランドにおける精神病院と患者:規律化から統治性へ、清泉女子大学人文科学研究所紀要、査読有、36 号、2015、182-160

⑦ 高林 陽展、20 世紀前半イギリスにおける教会・心理学者・精神科医の相克 ： スピリチュアル・ヒーリング問題をめぐって、清泉女子大学キリスト教文化研究所年報、査読無、22 号、2014、59-85

〔学会発表〕（計３件）

①高林陽展、史料から見る近代的身体－近現代イギリスにおける臨床体温計の製造・販売・流通をめぐって、立教大学史学会大会、2017 年 6 月 24 日

②Akinobu Takabayashi, The "quantified self" in history: clinical thermometry in England between the late nineteenth and early twentieth century, Society for the Social History of Medicine Conference, 7 July 2016

③高林陽展、戦争神経症と近代性－精神疾患はいかにして戦闘と関連づけられたのか－、第 19 回日本精神医学史学会、2015 年 11 月 7

日

〔図書〕（計３件）
① 高林陽展、みすず書房、精神医療、脱施設化の起源――英国の精神科医と専門職としての発展 1890-1930、2017、282
② 高林陽展 他、東京外国語大学出版会、痛みと感情のイギリス史、2017、（総ページ 368、16－54）
③ 高林陽展 他、東京大学出版会、精神医学の歴史と人類学、2016、（総ページ 272、59－80）

６．研究組織
(1)研究代表者
高林　陽展（TAKABAYASHI, Akinobu）
立教大学・文学部・准教授
研究者番号：３０５３１２９８